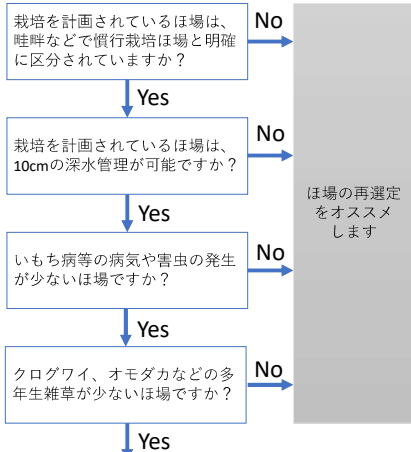


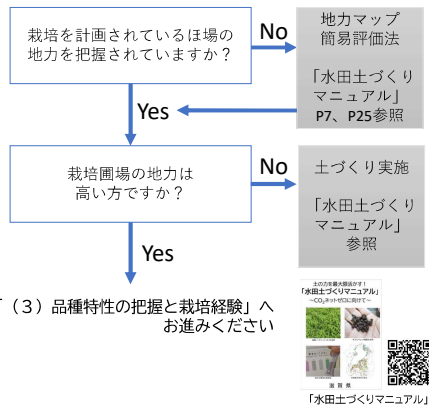
1 オーガニック栽培の事前チェック

(1) ほ場の選定



注) 乗用型の水田除草機による除草を行う場合は、長方形で面積が大きく、比較的耕盤が浅い圃場が適しています

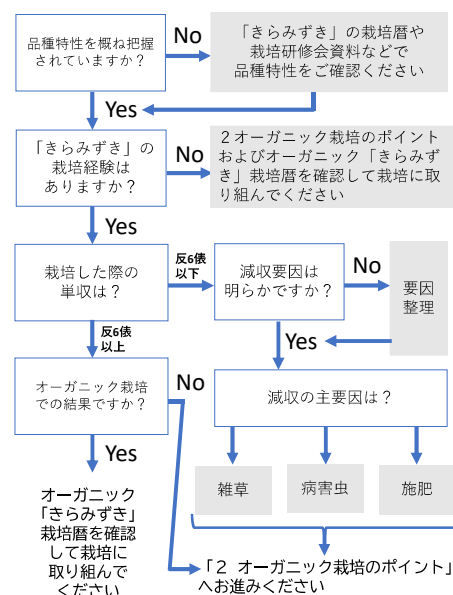
(2) ほ場の地力



「きらみずき」ポイントQ

「きらみずき」は中生品種であり、「コシヒカリ」と比べると生育期間が長くなります。このため、肥料切れを起こさないように注意が必要です。地力の不足分を補うのが施肥の基本です。地力が高ければ、施肥量を抑えることができ、かつ、肥料切れのリスクも回避しやすくなります。

(3) 品種特性の把握と栽培経験



2 オーガニック栽培のポイント

(1) 雑草対策

①育苗

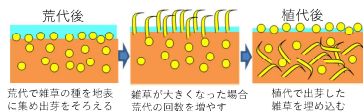
○深水管理や雑草との競合に打ち勝つため、**中苗→成苗**で充実の良い健苗を移植

- 育苗日数：30～40日
- 播種量：80～100g/箱
- 播種後14日後、21日後頃に追肥を行う（窒素成分1g/箱）



②複数回代かき、米ぬか散布

○荒代と植代の間隔を**2週間空け**、**発芽した雑草を埋め込む**



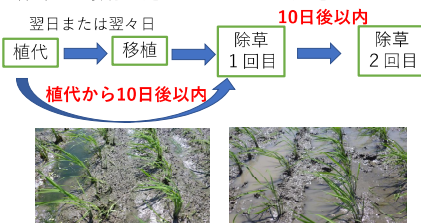
○**移植直後に米ぬかを60～100kg/10a散布** → 発芽に酸素を必要とする雑草の出芽を抑制

「きらみずき」ポイントQ

「きらみずき」は初期の分けつが確保しやすい品種です。分けつを確保して稲が水面を覆うことにより、雑草の生育を抑えることができます。

③水田除草機による機械除草

○作業の時期が遅れないように注意！



④深水管理

○移植直後は**5cm**、その後生育に合わせ**10～15cm**

- 雑草（ノビエ）の葉先が水面から出ない深さで管理
- コナギやホタルイには効果が低いので注意



深水管理のイメージ



(2) 病害対策

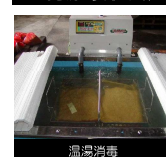
①ほ場選定

- 病原菌は残渣や土壌中で越冬するので、**常発ほ場を避ける**
- いもち病は水滴から侵入するので、朝露が乾きにくい**日当たりや風通しの悪いほ場を避ける**



②温湯消毒

- 発芽率を保ちながら殺菌効果を高めるため**60～62℃で10分間処理**する
- ※たつぷりのお湯を使い、初を入れた時の温度低下を極力防ぐこと！



③いもち病対策

- 置き苗**はいもち病の発生源となるので、速やかに**除去**する
- 有機JASで使用可能な農薬（カスガイシン剤等）を散布する



※カスガイシンは耐性菌の発生リスクがあるため連用しない！

「きらみずき」ポイントQ

「きらみずき」の葉いもちの抵抗性は“中”、穂いもちの抵抗性は“やや弱”です。周辺の草刈りを行う等、風通しの良い、いもち病の発生しにくい環境を整えましょう。

(3) 害虫対策

①斑点米対策

○畦畔の草刈り



・周りに早生品種が多いほ場では7月上旬の草刈りもしましょう！



②次年度の病虫害対策

・秋耕で害虫が越冬する**“ひこばえ”**(刈株再生芽)を速やかに**すき込み**しましょう！



(4) 土壌施肥管理対策

近年の猛暑下では登熟後期まで葉色を維持するのが難しく、**地力の維持や追肥・穂肥の施用**が重要です。

①有機物や家畜ふん堆肥で地力を維持！

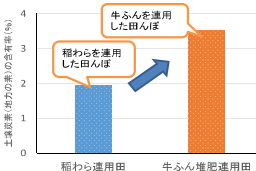
○作物残さ

・稲わら、麦わら等の残さは焼かずすき込むことで、地力維持効果が期待できます。



○牛ふん堆肥

・収穫残さに加えて、牛ふん堆肥を連用することで、地力の向上を図れます。



・一般的に、堆肥の地力増進効果の大きさは**牛ふん>豚ふん>鶏ふん**となります。

※より詳しい内容は下記を参照してください
「オーガニック近江米の手引き」p4～p5
「水田土づくりマニュアル」

②追肥と穂肥で葉色を維持！

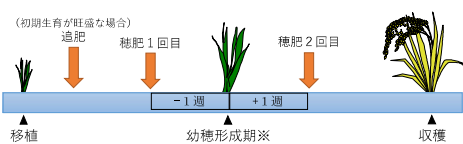
有機質肥料は化成肥料と異なり、**肥効がゆっくり**と現れます。

○追肥

・初期生育が旺盛になると幼穂形成期までに葉色が極端に落ちる可能性があり、**葉色が落ちる前に追肥**を行います。

○穂肥

・肥効が緩やかなため**幼穂形成期の1週間前**と、**1回目施肥の2週間後**の2回に分けて施用します。



「きらみずき」ポイントQ

近年の猛暑下では葉色の維持が難しく、**穂肥はなるべく減肥せず施用**するのが望ましいです。ただし、周辺ほ場のいもち病発生状況には注意が必要です。